

# イネ稲こうじ病

イネ稲こうじ病は *Villosiclava virens* (糸状菌) によって引き起こされる病害で、イネの籾に暗緑色の厚壁孢子の固まりである病粒（偽菌核）を形成します。**現在の農産物検査規格では、イネ稲こうじ病による被害粒の混入が確認された場合には規格外になり、経済的な被害が大きくなってしまいます。**  
近年、イネ稲こうじ病が多発生しているほ場が確認され、問題となっています。良質米生産のために適切な防除を行いましょう。

## ①病徴

出穂した後の籾に暗緑色で球形の病粒が認められる。病籾の1穂当たり着生数は通常1～数個であるが20個以上生ずることもある。



写真1 穂での発病



写真2 暗緑色の病粒（偽菌核）

## ②発生生態と伝染経路

病籾に形成された厚壁孢子が稲刈りなどによって地面に落下する。孢子は地表面で越冬し、田植後に厚壁孢子から発芽した菌糸がイネ体に侵入する。イネ体に侵入した菌は、その後幼穂に至り、花器を取り巻くように菌糸がまん延し、病粒を形成する。

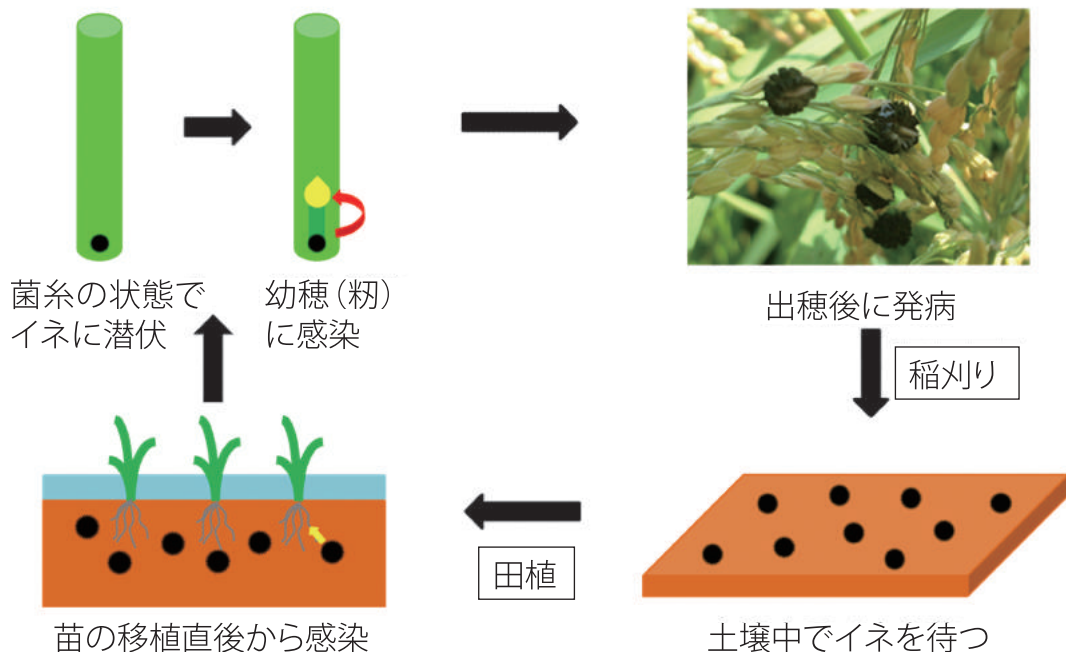


図 イネ稲こうじ病の伝染経路

### ③防除対策

#### ○薬剤による防除

- ・銅剤(最も効果が高い)を**出穂20～10日前**に散布する。
- ・シメコナゾール粒剤を**出穂21～14日前**に散布する。

※この期間以外の散布は効果がかなり落ちるので適期散布を行う(幼穂が1～5cmになっているのを確認して散布する)。

※出穂期でのいもち病との同時防除では本病は防除できないので注意する。

※但し稲WCSとして利用する場合は、シメコナゾールは使用しない。また銅剤を使用した場合は、黄熟期以降に収穫する。

#### ○耕種的防除

- ・多肥栽培は本病の発生を助長するので適正施肥を行う。特に肥料が遅効きしないようにする。
- ・田畑輪換によって本病の発生を減らすことができる。

### ④本田発生後の対応

- ・収穫前に可能な限りほ場で除去する。
- ・発生の無いほ場と分けて収穫・乾燥・調製を実施する。
- ・籾すり前に籾粗選機で選別する。(籾粗選機のふるい目は2.7mmが推奨される)



写真3 玄米に混入した稻こうじ病粒

### ⑤多発生要因と留意点

- ・土壌中の菌密度が高いと発生しやすくなるため、前年度に発生が多かったほ場は注意する。
- ・穂ばらみ期に降雨が予想される場合は、発生増加の恐れがあるため防除を行う。
- ・品種によって抵抗性に差があるが、飼料用イネは弱い品種が多い。

[発行]栃木県農業環境指導センター

〒321-0974 宇都宮市竹林町 1030-2 河内庁舎別館 3 階

Tel 028-626-3086 Fax 028-626-3012

ホームページ <http://www.jpnpn.ne.jp/tochigi/index.html>